



モーパッサン

女の一生

ピエールとジャン

脂肪の塊 短編

杉 捷夫 訳

河出書房新社

世界文学全集 16 モーパッサン



© 1960

編集委員

阿部知二 伊藤 整
桑原武夫 手塚富雄
中島健蔵

昭和35年1月20日印刷

昭和35年1月25日発行

定価 290円

訳者 杉 捷 夫
発行者 河 出 孝 雄
印刷者 草 刈 親 雄
装 幀 原 弘

印刷：中央精版印刷株式会社

製本：中央精版印刷株式会社

本文用紙：三菱製紙株式会社

同納入：株式会社柏原洋紙店

クロス：東洋クロス株式会社

同納入：株式会社石綿商店

発行所 東京都千代田区 株式会社 河出書房新社
神田小川町三の八 会社

電話東京(29)3721~7
振替口座東京10802

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

目次

女の一生	三
ピエールとジャン	三七
脂肪の塊	三八三
短編	
山小屋	四三九
シモンのパパ	四四三
わらいす直しの女	四五三
狂女	四六一
ジュール叔父	四六五
年譜	四七五
解説	四八〇
	(訳者)

女の一生

— ささやかな真実 —

主要人物

ジャームス この小説の主人公。男爵家の一人娘としてお人好しの両親の慈愛のもとに深窓に育ち、甘い恋と女の幸福を夢見る純情無垢な乙女。美男のラマール子爵と結婚する。

父 ジャームスの父親。善良で気の弱い男爵。

母 (愛称アデライッド夫人) ジャームスの母。

ロザリ ジャームスと乳姉妹の小間使。生粋のノルマンシ娘。

ラマール子爵 (ジュリアン) 美貌の青年貴族。ジャームスと結婚する。

ピエール (愛称ポル) ジャームスの一人むすこ。

ジルベルト フールヴァイル伯爵夫人。ジュリアンと不倫な関係をむすぶ。

アペ・ピコ 陽気な老司祭。

アペ・トルビヤック ピコ司祭の後任の若い司祭。狂信的な神秘主義者。

ジャーンヌは、自分の荷づくりをすまして、窓のところへ行ってみたが、雨はやんでいなかった。

しのつくような雨が、夜どおし、窓ガラスと屋根を鳴らして降りつづけた後であった。低くたれていっばいに水気をふくんだ空が、まるで穴でもあいて、地面に向かつて全部流れだし、地面を牛乳がゆのようにとき、砂糖のように流してしまいかとさえ思われた。突風がときどき重苦しい熱をふくんで通りすぎていった。あふれた溝のたてる音が人氣のない往来をみだし、往来に面した家は、海綿のように、湿気を吸いこみ、家のなかまでしみとおった湿気は、穴倉から屋根裏まで壁に汗をかかせていた。

ジャーンヌは、きのう修道院の寄宿舎を出てきたばかりで、とにかくこれで、永久に自由解放の身となり、あんなにながいあいだ夢みていた人生のすべての幸福をまさ

に手をのばしてとらえようとしているのである。もし天氣がよくならなければ、父親が出発をちゅうちょするのではなからうか、それが彼女には心配だった。で、朝からこれまで百度目に外の景色をのぞいて見るのであった。

それから暦を旅行かばんのなかにいれるのを忘れていたことに気がついた。月ごとにしきって、図案模様のまんなかに一八一九年という今年の年号を金文字で出した小さな厚紙を壁からとりはずした。それから鉛筆で最初の四段を消した。聖者の名前を一つ一つ消して五月二日まできた。これは寄宿舎を出た日である。

扉のそとで、「ジャネット！」と呼ぶ声がした。

ジャーンヌは「おはいりなさいい、お父さま」と答えた。父親が姿を現わした。

シモン・ジャック・ル・ベルチュイ・デ・ヴォ男爵は前世紀の貴族であった。変わり者でおひとよしなのである。ジャン・ジャック・ルソンの熱心な崇拜者で、自然に對して、野良や森や獸たちに対して、恋人のような愛情をいだいていた。

生まれが貴族であるから、本能的に九十三年を憎んでいたが、とはいえ、氣質からいえば、フィロゾフであり、受けた教育からは自由人であったから、専制政治を

唾棄^だしていたが、その憎みかたは毒にもならない思ひいれよろしくのものであった。

男爵の大きな力でもあり大きな弱点でもあるのは、善良さということであつた。愛撫^{あいぶ}し、恵み、抱擁^{ほうよう}するのに、いくつ腕があつてもたりないというふうな善良さであつた。造物主的の善良さ、散漫な、抵抗力のない、意志の力がどこか一つ麻痺^{まひ}しているといったようなもの、力強さがどこかかけているもの、ほとんど一種の悪徳ともいふべきものであつた。

理論家である男爵は、娘のために一系列の教育方針をたてていた。幸福な、善良な、まっすぐな、やさしい娘に育てようと考へていたのである。

彼女は十二の歳まで家で暮らしていたが、それから、母親の涙をおしきって、サックレ・クール（聖心修道院）の寄宿舎にいれられた。

父は娘をそこに嚴重にとじこめておいた。人の世からしきられ、人から知られず、また人の世のことを知らずにいるようにしておいたのである。十七になつたら清浄無垢^{けいじゆむこ}のまま自分に返してくれるように父は望んだのである。てずから、一種の正しい詩の浴槽のなかに娘をつける。ようといふつもりであつた。そうして、野良^{のら}を歩き、みのりゆたかな土地のまんなかで、そぼくな恋の姿、動物

の純な愛情、生命の明朗な法則を見せて、娘の魂をひらかせ、無知を啓発してやろうと思つたのである。

いま、娘は修道院を出てきたのである。はればれと顔を輝かせ、生氣と幸福への欲求にみちて、昼間のしよざいなさ、長い夜のつれづれ、希望ばかりがつぎつぎにわく孤独の生活のなかに、彼女の心がすでに描きなれていたすべての喜びと、なつかしいさまさまの偶然を、手をのばしてとろうとしているのである。

彼女はヴェロネーズの描く肖像画にそっくりであつた。はだの色のかなかにとけてしまつたのではないかと思われるようなつややかなブロードの髪。そのはだは、日光の愛撫をうけるときにほのかに見えるあお白いピロドのようなうすいうぶげにほかさされ、かすかにばら色をおびた、貴族娘のはだであつた。目は青かつた。陶製のオランダ人形の目のもつ不透明な青さであつた。

左の小鼻のそばに小さいほくらが一つあつた。右にも一つ、これはあごの上にあつた。そこには皮膚の色とほとんど見分けがつかないくらいよく似た毛が二三本ちぢれていた。背は高かつた。胸は豊熟し、胴まわりの線は美しく波うっていた。はつきりひびく声は、ときにかん高いほどに思われることがあつた。けれども彼女の朗かな笑い声は周囲に歓喜の波を放射した。なんども、くせ

になった手つきで、ちょうど髪でもなでつけるように、両手をこめかみのところへ持っていくのであった。

娘は父親のそばへかけよって、抱きしめながら接吻した。そうして、「ねえ、行くの？」ときいた。

父親は微笑して、かなりながくのぼしている、はやまっ白になった髪をふつてみせ、窓のほうへ手をさしのべながら言った。

「こんな天気はどうやって旅行するつもりかね？」

けれども娘は、やさしく甘えかかりながら、哀願した。

「ねえ、とうさま、行きましようってば、よう。ひるからになれば、晴れますわ」

——といったって、お母さんがなかなか承知しないよ。

——だいたいじょうぶよ、あたしがうけあうわ。その交渉ならあたしが引き受けてよ。

——おまえがお母さんの決心をきめさせてくれれば、わたしのほうには異存はない。

娘は男爵夫人の居間に向かってかけだしていった。この出発の日をじりじりしながら待ちに待っていたのである。

サックレ・クール（聖心修道院）へはいつて以来、ジ

ヤースはルーアンの町を離れたことがなかった。父親が自分のきめた年齢にならぬうちはいかなる遊山旅行も許さなかったためである。たった二度、二週間ほどパリへ連れて行かれたことがあった。といってもそれは都会である。彼女の夢みているものは田園だけであった。

いま一夏を、レ・ブールの屋敷ですごそうとしているのである。それはイポールの近くの断崖の上に立てられた祖先伝来の古風な館であった。ジャースはこの海辺での自由な生活から無限の歓喜を期待していた。それにこの邸はジャースの名義になっており、結婚したらずっとここに住まうことになっていた。

だから、昨日の夕方から小やみなく降りつづいている雨が、ジャースの生涯の最初の大きな心痛であった。

けれども、三分のち、彼女は、走りながら、母親の居間からとびだし、家じゅうにひびくような大きな声をあげた。「父さま、父さま？ お母さまがいんですって、馬をつけさせてちょうだい」

豪雨は少しも勢いがにぶらなかつたばかりでなく、四輪馬車が玄関の前に進み出たころには、勢いをましたのではないかとさえ思われた。

ジャースは車にとび乗るばかりにしていた。と、そこへ、男爵夫人が、一方からは夫に、もう一方からは、若者

のように均齊のとれた体格をした、がんじょうな、背の高い小間使いにささえられて、階段をおりてきた。ユー地方の生まれの生粋キムキのノルマンジ娘で、じっさいは十八になつたばかりなのであるが、見たところ少なくともはたちにはみえた。男爵家ではいくらか娘分といったふうの取り扱いをうけていたが、それはこの娘がジャースの乳姉妹だったからである。名前はロザリといった。

それにこの娘の主な役目は、奥様の歩行の介添役をとめることであつた。男爵夫人は、数年来心臓肥大症のためにすっかりふとつてしまい、たえずその心臓の苦痛を訴えていた。

男爵夫人は、はげしく息をはずませながら、古びた邸の玄関前の石段のところまでたどりつくと、雨水が川のようにあふれている前庭をながめて、つぶやいた。「ほんとに正気のさたじゃありませんね」

夫は、しじゅう笑顔をつくりながら答へた。「あんたがいいと言つたんだよ、アデライッド夫人」

夫人がアデライッドという、ぎょうさんな名前をもつていたので、夫はいつも、多少からかい気味の一種の敬意を表して、「夫人」という称号をつけて呼んでいたのである。

それから夫人はふたたび歩きだし、やつとの思いで馬

車に乗りこむと、馬車のばねが全部曲つてしまった。夫人のそばに男爵が腰かけ、ジャースとロザリは、馬に背を向けた座席に場所をとつた。

台所女のルエジヴィヌがいかかえのマントを持ってきたので、人々はそれをひざの上にひろげた。それからかごを二つ運んできたが、これは足の下にかくした。それがすむと、台所女は御者台きしよだいによじのぼつてシモン爺さんとならび、大きな毛布をすっぽり頭からかぶつた。門番夫婦が門をしめながら見送りに出てきて、荷車で後からくるはずの荷物について最後の注意をうけた。それから馬車は出発した。

御者のシモン爺さんは、雨のなかで背をまるくし、頭をたれて、三枚えりの外套がまきのなかにかくれていた。うなるような突風が、窓ガラスを打ち、往來に水をおしあげた。

馬車は、二頭の馬の早駆けに、勢いづいて河岸通りへおり、大型の船のならんでいるのと併行に進んでいった。船の帆柱や帆げたや綱具は、葉の落ちた木のように、雨足の濃い空につっ立っていた。それから、馬車は、モン・リブーデの長いブルヴァールにさしかかった。

やがていくつもの牧場を横ぎつた。ときどき、雨にぬれた柳が、死骸のようにぐつたりと枝をたれて、雨のし

ぶきのなかに、ぼんやりうかんでいた。馬の蹄鉄はびしゃびしゃと水をはねあげ、馬車の四つの輪はたちまちどろの輪になった。

みんなは口をきかなかつた。精神も地面同様ぬれそぼっているように思われた。かあさんはうしろによりかかり、頭をもたせて、まぶたをとじた。男爵はものうげな目つきで、ぬれそぼった単調な野良の景色をながめていた。ロザリは、ひざの上に包みをのせて、下層社会のものに特有の例の動物的な夢見ごころで物思いにふけていた。けれども、ジャースは、このなまあたにかい豪雨の下で、とじこめられていた植物が風にあてられたように、よみがえったこちがしていた。彼女の歡喜が、木の葉のしげみのように彼女の心を憂愁から保護していた。話はしなかつたけれども、彼女は大声にうたいたくてたまらなかつた。馬車のそとへ手をのばしてみたくてたまらなかつた。水をためて飲んでやりたい、そう思うのであつた。馬の早駆けに運ばれるのが、荒涼たる景色をながめるのが、この大雨のまんなかで安全に身をまもられていると感じるのが、ジャースには楽しかつた。降りしきる雨のなかで、二頭の馬のつやつやとぬれたしりが湯気をたてていた。

男爵夫人は、しだいに、眠りにおちていった。ふわり

とたれた六本の規則正しいらせん形のまき毛にふちどられた顔が少しづつ、傾いてゆき、首のまわりの三つにくびれた太い波形のたるみで力なくささえられていた。最後の波のうねりは胸の大海のなかに消えている、息を吸うたびごとに持ちあげられる頭は、持ちあがったと思うと、またがくりとたれる。ほおはふくれあがり、一方半びらきになったくちびるからあざやかないびきの音ももれた。夫が妻のほうにかがみこんだと思うと、豊かな下腹の上に組んだ両手のなかに、そつと、小型の革の紙いれをのせた。

この感触が夫人の目をさました。夫人は睡眠を中断された人特有のぼんやりしたようすで、どんよりと品物を見つめた。紙いれが落ちて、口が開いた。金貨や紙幣が馬車のなか一面に散らばつた。夫人は完全に目をさました。娘のうきうきした気持は笑声の火の矢となって爆発した。

男爵は金をひろいあつめ、夫人のひざの上にのせて、言った。「これがねえ、エルトの農場からのこつた全部だよ。レ・プープルを修繕させるために売りはらつたのだが、レ・プープルにはこれからたびたび住むことになるからね」

夫人は六千四百フランを数えると、静かにポケットの

なかへおさめた。

それは彼らの両親がのこしてくれた三十一カ所の田地のうちこのようにして売られた九番目の農場であった。それでも夫妻はまだ地面でおよそ年二万リイブルのあがり高を持っていた。これは上手に管理すれば、年に三万フランをあげることは容易であった。

夫妻は簡素な生活をしていたので、もしも家のなかに常住に口をあいている底なしの穴、善良さという穴があいていなかったならば、この収入でじゅうぶんたりるはずであった。善良さは、太陽が沼地を干あがらせるように、彼らの手から持金を干あがらせていった。金は流れていった。逃げていった。消えていった。どういうふうにして？ だれもなにも知らなかった。しよっちゅう夫妻のうちのどちらかが、こんなことを言っていた。「どうしてこうなったかわからないのだけれど、今日も百フランつかってしまった。なにも大きな買物をしないのに」それにこの容易に与えうるといふことは、とにかく彼らの生活の大きな幸福の一つであった。彼らはこの点に關してはみごとに人の心を動かすにたりるやり方でおたがいに了解しあっていた。

「ジャーンヌがきいた。「あたしのお邸ってきれい？」

男爵も快活に答えた。「いまにわかるよ、嬢や」

それでも少しずつ驟雨の猛威はおさまっていった。やがて、一種の霧のようなもの、細かく舞い狂う糠雨にすぎなくなつた。雲の天井が高くなり、白んだように思われた。と、とつぜん、いままで見えなかつた穴から、長い太陽の光線が斜めにさつと牧場の上にさした。

雲が切れて、大空の青い地が顔を出した。やがて、さけ日はだんだんと、引幕がひきわけられるように大きくなり、深いくっきりと晴れた紺碧の美しい空が下界の上にひろがっていった。

さわやかなやわらかい風が、大地の幸福なといきのように、過ぎていった。庭や森にそうて馬車が進んでいるときには、ときどき、羽をかわかす小鳥の性急な歌声が聞こえてきた。

いつのまにか夕方になつていた。馬車のなかには、ジャーンヌをのぞいて、いまではみんな眠つていた。馬に息つかせ、水にまぜた燕麦をたべさせるために二度は、ごやの前でとまった。

日はすでに落ちて、遠くで鐘が鳴っていた。とある小さな村で御者が角灯に灯をいれた。空にも点々とこぼれる星の飾灯がついた。あかりのついた家々が、火の一点となつて闇をつらぬきながらところどころに現われた。と、とつぜん、小山の背後から、樅の木立をすかして、

まっかな大きな月が、まだ眠りからさめきらぬような月が、ぼっかり浮かんだ。

非常に暖かいので、窓ガラスはおろしたままにしてあった。ジャーヌは、夢想につかれ、幸福な幻にあきて、今では休息をむさぼっていた。同じ姿勢をながくつづけているしびれが、ときどき彼女に目をひらかせた。そういうときに外を眺めると、あかりのさしている夜の闇のなかを農家の庭の木立が通りすぎたり、ところどころ野良に横たわっている牛が、首をもち上げたりするのが見えた。それから彼女は新しい姿勢をいろいろとやってみては、見かけた夢をもういちどとらえようとこころみた。けれどもたえまのない車のとどろきが耳について、頭をつからせた。ジャーヌはふたたび目をとじ、心もかちたもつかれきっているのを感じていた。

そのうちに馬車がとまった。大勢の男や女たちが手にあかりを持って、馬車の昇降口の前に立っていた。とうとうついたのである。ジャーヌはぼっかりと目をさまし、大急ぎでとびおりのた。父親とロザリは、一人の小作人に足もとを照らしてもらいながら、男爵夫人をほとんどの荷物を運ぶようにつれていった。夫人はすっかりつかれはてて、苦痛を訴えながら、消えるような小聲で、たえず、「ほんとにまあ、おまえたちや！」をくり返して

いた。飲むことも、食べることもいやがり、寝床にはいとすぐ眠ってしまった。

ジャーヌと男爵はさしむかいで夜食を食べた。

親子は顔を見合わせてにっこり笑い、食卓越しに手を握りあったりした。それから、二人とも子供らしい喜びのとりこになって、修繕のできた邸内の検分に出かけた。

それはノルマンジ特有の農園とも邸宅ともつかぬ背の高い宏大な住居の一つであった。灰色に変色した白い石で建てられていて、一家眷族をいれるにたるほどひろいものであった。

非常に大きな玄関兼廊下が家を二つにしきって、端から端へ通っており、前後両方の正面に大きな扉をあいていた。二つになった階段がちょうどこのとつづきの廊下をまたぐようにして、まんなかに空洞をのこし、二つの昇り口が橋のように二階で出合っていた。

一階には、右手へはいると、とほうもなく大きな客間があり、小鳥があそぶ木の葉のしげみを描いた壁掛が張りめぐらされていた。細目針のししゅう布で張った家具は全部、そのままラ・フォンテーヌの『寓話』の挿絵であった。狐とこうのりの話の描いてある、子供のじぶんに好きだったいすをふたたび見いだしたとき、ジャー

ヌはうれしさに胸がふるえた。

客間のわきには、古い書物がいっぱいつまった図書室と、ほかにもう二つ不用になっている部屋がついていた。左手には新しい板壁を張りかえた食堂と、ナブキンや下着類をおく部屋、配膳室、台所、それに浴槽つきの小さな部屋があった。

二階全体は縦にながく廊下でしきられていた。十ある部屋の十の戸口がこの通路に向かってならんでいた。ずっと奥の右手に、ジャーヌの部屋があった。二人はそこへはいつて行った。男爵は使わずに屋根裏の物置きに上げてあった壁掛の類と家具を使っただけで、最近新しくこの部屋の模様変えをしたところであった。

オランダできの、非常に古い壁掛が、変わった人物でこの場所をみたしていた。

しかし、寝台を見つけたとき、少女は歓喜の叫び声をあげた。四隅にかしの木で彫った四羽の大きな鳥が、まっ黒でろう光りに光っていたが、床をささえ、まるで床の番人といったかっこうであった。寝台の両側は花と果物を彫った大きな花束になっていた。優雅な丸溝のついた四本の柱は、天辺にコリント式の柱頭がついていたが、バラとキューピッドのからまっている軒蛇腹をささえていた。

寝台はなにかの記念碑のように立っていた。それでも、長い年月のために黒光りの光沢の出ている木口のかめしきにもかかわらず、ひどく優雅なものであった。足掛ぶとんと寝台の天蓋は二つの天のようにきらめいていた。ところどころに金糸でぬいとした大きなゆりの花が星をちりばめたように輝いている濃紺の古渡り絹で作られていたのである。

寝台の美しさを十二分に満喫しおわると、ジャーヌは、灯をさしあげて、壁掛をあらため、描いてある主題を見きわめようとした。

緑と赤と黄色との、世にも奇妙な着物をきた一人の若い領主と若い貴婦人とが、白い木の実のみのっている青い木の下で語りあっていた。木の実と同じ色の大きなうさぎが一匹、灰色の草を少しかじっていた。

人物のちようど頭の上に、それが遠景ということになるのであるが、尖り屋根のまるい小さな家が五つ見えた。それから、その上に、ほとんど空のなかに、まっかな風車があった。

花をつけている大きな枝葉模様が、これら全部のあいだをはっていた。

次の二つの壁面も最初のに非常によく似ていたが、ただちがうところは家々からオランダ人ふうの着物をきた

四人の小人の老人が出てきて、極度の驚きと怒りのしるしに両手を高く空にあげているのが見られることであつた。

が、最後の壁掛は一場の悲劇を現わしていた。相変わらず草をかじっているうさぎのそばに、青年がたおれて、死んでいるのであろう。若い貴婦人は、青年を見つめながら、剣で自分の胸を刺していた。それから木の実はまっ黒にかわつていた。

ジャースは絵の意味を了解することをあきらめかけていた。と、そのとき、片隅にごく小さな動物が一匹いるのを発見した。それは、もしも、うさぎが生きていれば、草の葉のように食べてしまひそうなものであつた。とはいへそれは獅子ししだつたのである。

そこで彼女にも、ピラムとチスベの不幸な運命を描いたものであるということが読めた。彼女は意匠の単純さに微笑したけれども、この愛の冒険の凶にとりまかれてゐるのを幸福に感じた。これはたえず自分の胸になつかしい希望を語ってくれるであらう。毎晩、自分の夢のうえにこの伝説に残る遠い昔の愛の翼をひろげさせてくれるであらう。

その他の家具はひどく異なつた様式を集めていた。それはおのおのの時代が、つぎつぎに家にのこす家具で、こ

れがために古い家はあらゆるものの雑居してゐる一種の博物館になるのである。すばらしいルイ十四世時代のたんすは、まばゆいばかりの金具でおおわれ、いまだにその時代の花模様はなようの絹をかぶせたルイ十五世式の二つの肘掛ひじかけいすにはさまれてゐた。バラの木でつくつた机が、まるいガラス蓋かたのなかに帝政時代の置時計のいれてある暖炉棚と向かいあつてゐた。

その時計は、金メッキした花園の上に四本の大理石の柱でささえられてかかつてゐる青銅製の蜜蜂の巣になつてゐた。細長いわれ目から巣のそとへ突きでてゐるきやしやな振子が、この花園の上に羽が七宝でできている一匹の小さな蜜蜂を永久に回らせてゐた。

文字板は極彩色の陶製で、巢の横腹にはめこんであつた。

時計が十一時をうちはじめた。男爵は娘に接吻せつぶんし、自分の部屋にひきあげた。

そこで、ジャースは、なごりおしかつたけれど、寢床にはいつた。

一瞥いちげつを与えて、ひとわたり部屋を眺め、それから、うそくを消した。けれども寝台は、頭のほうだけが壁にくつついていて、左手には窓があつたので、そこから月の光が潮のように流れこみ、床の上に光の水溜りをひろげた。

月光の反射が壁にはねかかっていた。ピラムとチスベの動かぬ恋の姿勢を、よわよわしく愛撫あひなしているあお白い反射。

足もとのほうと向きあった別の窓から、一本の大きな木が、水のようにやわらかい光を全身にあびているのがジャーヌの目にうつった。寝がえりをうって、目をとじたが、やがて、しばらくたつと、またあけてしまった。

まだ車の動揺にゆられているような気がし、わだちの音が頭のなかで鳴りつづけていた。初めはじつと身うごきをしないでいた。静かにしていればしまいには眠られるだろうと考えたのである。けれども心のいらだたしさがまもなく全身にひろがっていった。

両脚にひきつりがおこり、熱がだんだん高くなってきた。そこで起きあがって、足も腕もはだかのまま、ながい下着一枚で、——それが幽霊のようなようすをジャーヌに与えたが、——部屋の床板の上にひろがっている光の沼を横ぎり、窓をあけて外を眺めた。

外は非常に明るく、真昼のようによく見えた。むかし幼女時代に好きだったこのかいわいがごとごとくこの少女には見おぼえがあった。

まず正面に広い芝生があったが、それは夜の光のもとで、バタのように黄色く見えた。巨人のような木が二

本、邸の前に哨兵のようにそびえていた。北側のはすずかけ、南側のは菩提樹ぼだいじゆであった。この広い芝生のすつと端に、しげった小さな林があって、それがこの屋敷の限界になつていた。年じゅう吹きつける潮風のためにねじれ、梢こすえを平らにされ、葉を落され、屋根のような傾斜がついて刈りこまれたようになった年をへた五列のこれの木のおかげで、屋敷は沖からの突風から保護されていた。

この一種の囲い場は、とほうもなく背の高いブープリエエ（白楊樹）の長い二本の並木道で左右が区切られていた。ブープリエのことを、ノルマンジではブーブルと呼ぶ。この並木道が主人たちの住居と、それにつづいている二つの農園をへだてていた。農園の一つにはクイーヤール一家が住み、他の一つにはマルタン一家が住んでいた。

このブーブルが館にその名を与えていたのである。この囲いの向こうに、はりにしだがまばらに生えた、鋤すのはいらぬ広い野原がひろがっており、その上を夜となく屋となく、潮風が音を立てて吹き渡っていた。それからとつぜん傾斜がつきて百メートルほどのまっ白にきつ立った断崖となり、断崖の足もとは波に洗われていた。

ジャーヌは、遠く、星の下に眠っているように見える、はてしなくつづく、もくめ模様もくめがたの浪の表面を眺め

やった。

太陽のないこの静寂のなかに、自然のあらゆるものの匂いが発散していた。下の窓にはいあがつているジャスマミンが鼻をつくような吐息をたえず発散し、それよりほかすかなわか葉の匂いとまじりあっていた。ときどき思ひ出したように沖から吹いてくるゆるやかな風が、塩気をふくんだ空気としおたれた藻草の強烈な匂いを運んで通りすぎた。

少女は初めは空気を吸いこむ幸福感に身をまかせていたが、やがて田園の静けさが水浴のように気持をしずめてくれた。

夕方になると目をさまし、そのはかない存在を夜の静けさのなかにかくしているあらゆるいきものが、音もたてずうごめきながら薄明の夜の世界をみたくしている。声を立てぬ大きな鳥が何羽も斑点のように、影のように、空をすぎていった。目に見えぬ虫のかすかな羽音が耳に伝わり、音もたてずに走りまわるけはいが、露をふくんだ草のあいだや、ひとけのない道の砂の上に動いた。

ただいく匹かの憂うつなひきがえるが月に向かって短い単調なしらべを投げつけていた。

ジャーマには自分の胸が、この明るい晩のようにささやき声にみちてふくらんでくるように思われた。そのさ

わめきが、いま自分をとりまいているこの夜のいきものに似た無数の欲望が胸をはいまわり、蟻のように集まってくる。ある親和力が彼女をこの生きた詩に結びつけた。夜のなごやかなほの白さのなかに、人間の力を超えた戦慄が走り、とらえることのできない希望、なにか幸福の息吹きといったようなものはずむのを感じた。

少女は恋を胸に描きはじめた。

恋！ それは二年このかただんだんまぢかに迫ってくるという不安で彼女の胸をみたくしていた。いま彼女は自由に恋のできる身である。出会いさえすればいいのである。そのかたに！

どんな人だろうか！ 正直なところ自分でも知らなかった。自分に問うてみる気さえおこらなかつた。その人はそのかたなのである。それだけであつた。

彼女はただ自分がかたを心から熱愛し、そのかたも自分を全力をあげて可愛がってくれるということを知っているだけであつた。二人は今日のような晩にいつも、星から降ってくる光の灰をあびて、散歩するだろう。

二人は、手をとり合い、びったりと寄りそって歩くだろう。自分たちの心臓の鼓動を聞き、たがいの肩の熱を感じ、二人の愛を夏の夜の甘美な清澄さにとかしながら、たがいの愛撫の力だけで、心の奥の奥の考えまで了解し